

新アッシリア時代の女性たち

サアナ・スヴェルド*

唐 橋 文 訳

この講演では、まず、メソポタミアにおける女性研究の問題点をいくつか指摘し、新アッシリア帝国の女性たちについて概観した後、宮廷の女性たちに焦点をあてたい。その中でも特に、王妃、宮廷行政に携わる女性たち、宮廷の女性たちを扱うこととする¹⁾。

1. 古代メソポタミアの分野における 女性研究の研究方法与問題点²⁾

女性研究が本格的に始まったのは1960年代のことである。その異なる研究方法は研究の「波」としばしば描写されてきた。最初の波は、それまでの研究が人口の半数の活動を無視して、男性が成し遂げたことのみを扱っていたという「啓示」によって引き起こされた。そこでフェミニスト研究が女性を歴史の中に書き入れ始めたのであった。古代メソポタミア研究においても、この女性研究の最初の波の重要性が認識され、遅ればせながら1986年の第33回国際アッシリア学会のテーマに「女性」が選ばれた。

フェミニスト研究の第二波は1970年代に起こった。その主な成果の一つにジェンダー概念の進化があげられるであろう。すなわち第二波は、ジ

* Saana Svärd (ヘルシンキ大学アッシリア学特任教授)。

エンダー役割を生物学的な性に押し付けられる社会的に構築されたアイデンティティと見なしたのであった。また、第二波では、女性を歴史に書き入れることから女性の従属的状态の原因を見つけようとする試みに研究の焦点が移った。そこから次のような二つの見方が生じた。

その一つ、抑圧仮説では、万国共通の女性の抑圧が主要な概念とされ、抑圧された女性たちの歴史記録が求められる。しかしながら、家長制のヨーロッパ的概念は普遍的ではなく、時間を遡って投影されるべきではないという指摘もある。この説とは相反するものの、やはりそれに関連したもう一つの見方では、母系制が古代世界の抑圧された歴史的现实であったとされる。第二波に属す多くの研究者たちは、家長制が発達した時期を有史前末期から歴史時代初期とし、それ以前は、女性が男性と等しいか、あるいは、それ以上の権限を有していた母系社会が存在していたと仮定する。母系制から家長制への変化は、人類の有史時代が始まった古代メソポタミアで研究が可能かもしれないと考える人たちもいる。しかし、母系社会諸説の弱点は、家父長制が普遍的であったとする抑圧仮説と共通している。すなわち、有史前の母系社会は実体のない作り事で、まさにそれが打ち倒したいと願った家父長制のナラティブの一部を構成するものであった。これは、第二波の諸研究が直面した最も難しい問題でもあった。しばしば欧米的なステレオタイプは、男性を公的、活動的、強大で支配的なもの、女性を家内的、受動的、無力で従属的なものと決めつけた。そういった分類がほとんどあてはまらない場合があるのにもかかわらず、それを過去に遡って投影しようとしてきたのである。女性あるいは人々を一般化する試みは研究をひどく制限し、ジェンダーの多様性を、「事実を反映しない」あるいは「常軌を逸脱した」と断定したのであった。

第三波は、ポストモダニズムの影響の下 1980 年代に始まった。ポストモダニズムを定義するのは容易なことではないが、様々なポストモダニズムのアプローチに共通する要素は、あらゆる知識は社会的に構築されてい

るという確信である。ポストモダニズム理論は、どの解釈も同様に優れている訳ではなく、知識は学者たちによって発見されるのではなく作られるのだと主張する。当然ジェンダーの役割とセクシュアリティの研究もこの視点からなされることになる。すなわち、第三波の研究は、身体とセクシュアリティを中心にすえ、それらが社会においてどのように構築されたのかを徹底的に議論する。その結果、「性」はごく自然なもので、社会がその上にジェンダー印をおしているのだという考え方が放棄された。ミシェル・フーコーとジュディス・バトラーはともに、ジェンダー化された主体はいつも力関係の母体のなかで生み出されると述べている。この見方からすると、性は文化の規範の枠外に存在し得なくなる。バトラーにとって、ジェンダーは、その人の状態ではなく、その人の一連の行動であった。

このフェミニスト研究の第三波は、古代メソポタミアの分野にあまり大きな影響を及ぼさなかったが、それでもいくつかの研究をあげることができる。例えば、身体に関連しては、図像学における裸体像と身体の意味するものを扱った研究（Asher-Greve and Sweeney 2006; Winter 1996）、あるいは、セクシュアリティとジェンダー・ヒエラルキー（Guinan 1997）やジェンダー表象（Bahrani 2001）を扱った研究等がある。また、性とジェンダーの違いやジェンダー化された身体概念（Asher-Greve 2008）、曖昧なジェンダー、第三のジェンダーの可能性やホモセクシュアリティについても研究がなされてきた（McCaffrey 2002; Nissinen 1998）。さらに、イデオロギーの諸概念とジェンダーについても研究が進んでいる（Pollock and Bernbeck 2000）。しかしながら、まだ女性とジェンダーに関する研究は多いとは言えず、今もなお多くの研究者たちは第一波が意図したような類いの研究に従事し、古代メソポタミアの歴史に女性を書き込む作業をしている。

フェミニスト研究の三つの波は、確かに年代的なものではあるが、それぞれ特色ある方法論をとった。特に第三の波は、性・ジェンダー・従属の

「普遍的」概念——実際は現代の欧米のそれであったが——という仮定に挑戦した点で、先の二つの波とは根本的に異なっていた。

メソポタミアの女性研究を、より大きな女性研究あるいはフェミニスト研究の枠組みの中で見てきたところで、もう一つの特異な問題点に触れたいと思う。それは、“double-invisibility”「見えないことの二重性」の問題である。見えないことの第一層は、古代メソポタミアで文書が書き記された時に生じた。当時の書記たちは、ほとんどが男性で、また、記述に値すると考えられた物事の大半も男性の活動領域に関わっていた。見えないことの第二層は、楔形文字が解読されて、永いこと忘れられていた文化に関する研究成果が現れはじめた 1850 年代以降に生じた。ここでも研究者たちの大多数は男性で、また、研究に値すると考えられたテーマも女性と関わることはほとんどなかった。1960 年代以前、「女性」は「自明」な範疇であり、女性の立場や地位が重要な研究課題となるとは考えられていなかった。古代メソポタミアの女性について研究がなされた場合、しばしばそれはオリエンタリズムのナラティヴに組み入れられ³⁾、ハーレム、ヴェール、淫らな聖なる娼婦がアッシリア学研究に蔓延った (Holloway 2006; van de Mieroop 1999: 145-152)。いまだに時々そのような傾向が見られる (Assante 2003)。

2. 新アッシリア帝国と女性たち

新アッシリア帝国は、古アッシリアの伝統にその起源があった。古アッシリア王国はおおよそ前 2000 年から前 1750 年に年代づけられている。古アッシリア王国と中アッシリア王国の間の歴史は、ミタンニ王国が前 1350 年頃崩壊した時、アッシリア王国が再び出現したということ以外、あまりよくわかっていない。中アッシリア王国は、その後おおよそ 300 年続いた。前 1050 年から新アッシリア王アッシュルダン 2 世 (前 934～912 年) まで、

楔形文字史料はほとんど残っていないが、アッシリアに一貫する文化的な継続性を明らかに見てとることができる。

新アッシリア帝国は、前 934 ～ 745 年に帝国の中心部が確立され、その後、前 705 年までに領土が地中海からペルシア湾に達したという二つの段階を経て形作られた。戦利品、貢物や大規模な捕囚を含む人的資源が帝国に巨大な富をもたらし、帝国拡張期における戦争の経済的効果は非常に大きかったといえる。新アッシリア帝国の文書史料は、ほとんどがこれと前後する時代、いわゆるサルゴン王朝時代（前 721 ～ 612 年）のものである。ニネヴェの王宮書庫からは、神託、占星術報告、書簡、条約、誓約、契約、行政文書など多岐にわたるジャンルの史料が出土した（the State Archives of Assyria = SAA）。王碑文（the Royal Inscriptions of the Neo-Assyrian Period = RINAP）や属州の行政センターの文書も数多く残されている。それに比べると私的な文書庫や神殿の文書庫は少数である。

女性に関して一般的に言えることは、私たちの手元に残された記録はもっぱら、富裕で有力な、書記を雇う必要性と財力があった女性たちに限られているということである。新アッシリア帝国時代、エリート層は男性も女性も、土地を売買したり、賃貸したり、また、他の様々な物品を取引したりしていた。現代的な意味合いでの自主性という概念をあてはめるべきではないが、男性も女性も同じ法的権利を有していたと言えるであろう。個人はほとんど常に家——普通は男性が家主——のために行動したが、女性が商取引を行う際に男性後見人の許可が不可欠だったということを示す証拠はない。遺産相続に関しては、古代メソポタミアの歴史を通してそうであったように、息子の取り分が多く、娘は嫁資を与えられていた。また、私的な経済活動に加えて、女性も国や神殿の行政といった公の場で様々な役割を担っていた。確かに、どちらの分野でも男性のほうが圧倒的に多数であったことは明らかであるが、他方、既婚女性は男性が関わらない領域で活躍した。すなわち、彼女たちは、子供たちの世話をしたり、家族の宗

教を守ったりしながら家事を切り盛りし、家庭で使用する日用品や織物などの商売品を作ったりしたのである。

新アッシリア時代の女性たちの分類の仕方については他の方法も可能であるが、私は(1)宮廷の女性たち(2)神殿の女性たち(3)その他の女性たち、とするのが良いと思う。この講演では(1)宮廷の女性たちに焦点をあてるが、その前に(2)と(3)の女性たちについて簡単に触れたい。

神殿関連の女性たち(2)については、神殿文書庫がほとんど発見されていないため、あまり記録がない。女性の預言者がいたことはわかっているが(Stökl 2010)、女性の儀式要員についての証拠はきわめて乏しい。女性の演奏家は、神殿においても言及はあるが、むしろ王宮に仕えていたことのほうが良く知られている。王宮にも神殿にも属していなかったと思われる女性たち(3)も存在した。しかし、彼女たちへの言及はいずれも文書のなかできわめて短く、詳細は不明である。娼婦や富裕な寡婦など社会的に特殊な地位にあった女性たちは、婚姻関係にある女性たちよりも独立の度合いが高かったかもしれない。しかしながら、それに関連する史料と研究が欠如しているため推測の域をでない。

考古学遺物も文書史料も、そのほとんどが社会の上層部に関わっている。しかも、新アッシリア時代の文書の多くは王宮関連施設から出土している。したがって、私たちが知っている新アッシリアのエリート女性たちは、必然的に王宮関連の組織に属していた女性たちということになる⁴⁾。そして、それらの王宮の女性たちは、王妃たち(セクション3)、特筆すべき女性の宮廷管理者(šakintu)や女性書記などを含む行政・管理の職にある女性たち(セクション4)、宮廷女官(sekretū)や演奏家を含むその他の女性職業人(セクション5)などのカテゴリーに分類できる。

新アッシリア時代の王家の女性たちに言及している文書は30点あるが、その中の19点は王女たちへの言及である。年代的に最も早いのは、アッシュルナツィルパル2世(前883～859年)の姉妹によるキドムリのイシ

ユタル女神への奉納を記すものである。王女たちの中で最も顕著な人物は、エサルハドンの娘シェルア・エイラトであろう。彼女は、当時即位前の皇太子であったアッシュルバニパルの妻に自分で手紙を書き送った。一般的に王女たちは祭儀と商取引に関与していたが、行政文書や書簡にも彼女たちへの言及が見られる。彼女たちは、父王の宮廷に留まればかなりの影響力を持ったが、外国の王たちに嫁ぐことことで外交面でも資するところが大きかった。皇太子の妻は、彼女自身の家を持ち、「家の女主人」というタイトルを有していたことが知られている（Svård and Luukko 2009）。

3. 新アッシリア帝国の王妃⁵⁾

新アッシリア時代の王は理念上では帝国の唯一の権威であるが、アッシリアの属州と軍隊の管理・統括において、実際は、高官や有力者たちが重要な役割を果たした。そして、有力者たちとは別に、王妃（MI₂E₂GAL = sēgallu「王宮の女」）と皇太子（mār šarri「王の息子」）は、帝国行政の重要な部分を代表する宮家を所有した。特に王妃は単なる王の妻以上の存在だった。彼女は、行為ならびに表象において質的には王のそれに等しく、エリート女性の中で唯一無二の存在であった。

王妃が相当の財力を有していたことは、文書だけでなく、カルフ（今日のニムルド）の王妃たちの墓から見つかったまばゆい黄金の品々からも明らかである⁶⁾。宮廷の高位の女性たちが住んでいたと思われる北西宮殿の床下から何人かの王妃たちの墓が出土した。その中の最古の墓は、宮殿を建造した王アッシュルナツィルパル2世の妃ムリッス・ムカニシャト・ニヌアのものである。彼女の墓からは、シャルマネセル3世（前784～773年）の妃ハマの金製円筒印章も発見された。ハマもここに埋葬された可能性がある。また、第49室の床下の棺には二人の女性が埋葬されており、その身元はティグラトピレセル3世（前744～727年）の妃ヤバーとシャルマ

ネセル5世（前726～722年）の妃バニトゥと確認されている。後にサルゴン2世（前721～705年）の妃アタリアもそこに埋葬された。王宮の床下から発見された他の墓については、誰が埋葬されていたのか判明していない⁷⁾。

王妃あるいは皇太后は165点の文書に言及されている⁸⁾。基本的には、新アッシリア帝国に王妃は常に一人と決まっていたらしい。王妃は、彼女が組織管理する家組織の長として、王である彼女の夫が王位を譲渡しても、彼女が生きている間その地位を保持したと考えられる。ところで、王妃には王位継承者を産んだ女性になると決まっていたわけではないらしい。また、どのように王位継承者が選ばれたのかもよくわかっていない。皇太子は王の息子であったが、必ずしも長子ではなく、また、必ずしも王妃(MI₂, E₂.GAL)の子でもなかった。とはいえ、母親が高位にあれば、王位後継者を選ぶ際にその子是有利であった可能性はある。

王妃は神々に宝飾品類を献納し、神殿組織を支え、神託を授かり、祭儀や政治に関わった。王妃に宛てられた書簡からは、多くの高官たちに敬われていたことが読み取れる。王妃の家組織は、帝国中に広大な領地やいくつかの宮殿、多数の使用人たちを所有していたが、それらは王妃自身の私的な財産ではなかった。王妃はその称号とともに時の政府の一翼を担う重要な役割を受け持っていた。様々な側面において王妃の行為は王のそれに対応した。特に、サルゴン2世（前721～705年）の治世中およびその後、王妃も軍隊を所有するようになったことは注目に値する。王妃サンム・ラマトと王妃ナキアが軍事行動に関与したことを示す史料もある。

アダドネラリ2世（前810～783年）の母サンム・ラマトがその摂政だったかどうかについては今なお議論が続いているが、彼女が息子と共に軍事遠征を行い、戦勝記念碑を建立したのは確かである（Grayson 1996: 204-205）。彼女は、もっぱら息子の治世中の文書から知られているが、息子の父シャムシアダド5世（前823～811年）の妃であった。アッシュ

ール市の石碑が立ち並ぶ中庭におかれた彼女自身の石碑に加えて、彼女はカルフのナブー神殿に納められた二つの碑文にも言及されている。カルフの知事がそこに像を二体、「主人であるアッシリア王アダドネラリの生命の為に、そして、女主人である王妃サンム・ラマトの生命のために」奉納したのであった⁹⁾。彼女が後代のギリシア伝説セミラミスの名前のもとになった王妃である可能性が高い。彼女の業績はアッシリアの歴史を超えて記憶されたのであった（Bernbeck 2008: 358-364）。

王妃ナキアはアッカド語名をザクートゥといった。彼女は三代の王、セナケリブ（前 704 ～ 681 年）、エサルハドン（前 680 ～ 669 年）、アッシェルバニパル（前 668 ～ 630 年頃）の治世の間、王妃家の長であり続けた。ナキアの子エサルハドンの治世中の一時期、彼の妃エシラ・ハンマツが前 672 年まで（すなわち死去するまで）王妃の称号を用いたが、その後再びナキアが、少なくとも、ひ孫のアッシェルバニパルの治世当初まで王妃の責務を遂行した。彼女が関与する文書が王妃関連文書のおよそ三分の一を占める（Svård 2015: 40-48, 177-223; Melville 1999）。

王妃ナキアは「ザクートゥの条約」と称される文書から最も良く知られている。そこには、ザクートゥが、アッシェルバニパルの兄弟たちや全宮廷、ひいては全国に新王アッシェルバニパルへの忠誠を誓わせたことが記されている。アッシェルバニパルは彼女の「お気に入りのひ孫」であった（SAA 2 8）。この条約は、王以外の人物によって発布された唯一の条約であった。政府の政策決定においてナキアが重要な役割を果たしたことを示す最も明らかな例である。以下に条約のはじめとおわりの部分を訳出した。

（これは）アッシリアの王セナケリブの王妃、アッシリアの王エサルハドンの母ザクートゥが、彼（＝アッシェルバニパル）と等位の兄弟シャムシュ・シュム・ウキン、およびシャマシュ・メトゥ・ウバリツト、ならびに他の兄弟、王家の子孫、有力者たち、知事たち、有髭お

よび他の宮廷吏たち、王の取り巻きたち、免税者たち、王宮への出入りを許可された者たち、アッシュールの土地の住民——老いも若きも——との間に交わした忠誠の誓約である（SAA 2 8: 1-9）。

もしあなた方が、あなた方の中に攻撃の準備ができた軍隊や陰謀があると聞いたり知ったりしたなら、それが、有髭および他の宮廷吏たちであれ、彼の兄弟たちであれ、王家の子孫であれ、あなた方の兄弟であれ友人であれ、国の人々の誰であれ、もしあなた方がそれについて聞いたり知ったりした場合、あなた方は彼らを捕え殺さなければならない。あなた方は彼らを彼の母ザクトゥとあなた方の主人、アッシリアの王、アッシュルバニバルの前に連れて来なければならない（SAA 2 8: 18-27）。

他にもナキアの並外れた行動力をしめす事柄がある。彼女は、息子のエサルハドンのために王宮を建造したと二つの碑文に記されている（RINAP 4 2003, 2004）。それらの碑文の様式と内容は、王宮を建造し、王である息子と建造を記念する王妃に焦点があてられている。碑文の意図の一つは、ナキアを、息子の支配を強力にサポートする権威ある人物として示すことにあったにちがいない。この二つのテキストはきわめて断片的であるが、保存状態が良い部分にナキアの行為が次のように描写されている。

彼（エサルハドン王）は、征服した土地の住民、彼の弓で略奪した敵を支配の分け前として私に賜った。私は彼らに鍬と泥をいれるカゴを持たせ、泥煉瓦を作らせた（RINAP 4 2003: ii 5'-14'）。

彼女が祭儀の段取りを整え、神殿経済に貢献していたことを物語る多数の書簡や、高官から彼女宛に送られた丁寧で甘言あふれる書簡が残されている